

## 五 国家存亡の危機とインマヌエル預言

イザヤ書 7:14 は、有名な処女降誕の預言である。しかし、この預言が具体的な危機的状況の下になされていることに目を留め、状況との有機的関係の中での神の「しるし」と「ことば」として理解する人は少ない。7章は6章と同じように、物語の日付の明らかな箇所である。それはヨタム王が死に、アハズ王が即位して間もなくのことで、前734年と推定される（緒論1a「イザヤとその時代」）。それゆえ、6章の後に7章が来るのは当然であるが、同時に、7章は、「心をかたくなにする」宣教のわざが具体的にどのように表れたかを例示する。

1節 ウジヤの子ヨタムの子、ユダの王アハズの時のこと、アラムの王レツインと、イスラエルの王レマルヤの子ペカが、エルサレムに上って来てこれを攻めたが、戦いに勝てなかった。

וַיְהִי בַיּוֹם אֲחָז בֶּן-יִזְיָהוּ בֶן-עֲזִיָּהוּ מֶלֶךְ <sup>WTT</sup> Isaiah 7:1

יְהוּדָה עָלָה רִצְיִן מֶלֶךְ-אַרָּם וּפְקָח בֶּן-רְמַלְיָהוּ

מֶלֶךְ-יִשְׂרָאֵל יְרוּשָׁלַם לְמַלְחָמָה עָלָיָהּ וְלֹא יָכַל לְהִלָּחֵם

עָלָיָהּ:

<sup>LXT</sup> **Isaiah 7:1** καὶ ἐγένετο ἐν ταῖς ἡμέραις Αχαζ τοῦ Ἰωαθαμ τοῦ υἱοῦ Οζιου βασιλέως Ἰουδα ἀνέβη Ραασων βασιλεὺς Αραμ καὶ Φακεε υἱὸς Ρομελιου βασιλεὺς Ἰσραηλ ἐπὶ Ἱερουσαλημ πολεμῆσαι αὐτήν καὶ οὐκ ἠδυνήθησαν πολιορκῆσαι αὐτήν

<レツイン>は、アラムすなわちシリアの王で、「しっかりした」「堅固な」または「君主」の意味。前738年、アッシリヤのティグラテ・ピレセルに貢を納めた。ペカと連合してユダを攻めた時、一隊はサマリヤでイスラエル軍と合流したが、一隊はヨルダン川の東を南下し、エラテを攻めた(列16:6)。しかし、ティグラテ・ピレセルがアハズの要請を受けて南下し、前733-732年に首都ダマスコを包囲し、レツインは殺された(列16:9)。

<ペカ>は、イスラエルの王で、「目を開いた者」の意。もともとギルアデに勢力を有していた地方の豪族であった(列15:25)。彼は、ヤロブアム2世の死に伴う混乱に乗じ、前751年に北部ギルアデとガリラヤに勢力を張り、メナヘムの治世のほとんどにわたって、その勢威を保ち、ティグラテ・ピレセルが来てメナヘムの支配を確立するまで、メナヘムの不安の原因となった(列15:19)。その後、メナヘムに仕えて高官となったが、メナヘ

ムが死んでその子ペカフヤが王になると、ペカフヤを殺して王となった(列 15:25.前 740年)。前 734年、レツインと協力してエルサレムに迫り、初めは勝利を収めたが、アッシリヤ軍がガリラヤを通過して南下して来たため撤退した(列 15:29)。その時、預言者オデデの忠告を受け、捕虜を釈放した(歴 28:5-15、列 16:5-9)。前 732年、エラの子ホセアが謀反を起こし、ペカを殺した(列 15:30)。

2節 ところが、「エフライムにアラムがとどまった」という報告がダビデの家に告げられた。すると、王の心も民の心も、林の木々が風で揺らぐように動揺した。

וַיִּנְדַּבְּ לְבַיִת דָּוִד לְאמֹר נַחַה אֲרָם עַל־אֶפְרַיִם<sup>WTT</sup> Isaiah 7:2

וַיִּנְעַ לְבָבוֹ וּלְבַב עַמּוֹ כִּנְוַע עַצִּי־יֶעֶר מִפְּנֵי־רוּחַ:

<sup>LXT</sup> **Isaiah 7:2** καὶ ἀνηγγέλη εἰς τὸν οἶκον Δαυιδ λέγοντες συνεφώνησεν Ἀραμ πρὸς τὸν Εφραϊμ καὶ ἐξέστη ἡ ψυχὴ αὐτοῦ καὶ ἡ ψυχὴ τοῦ λαοῦ αὐτοῦ ὃν τρόπον ὅταν ἐν δρυμῶ ξύλων ὑπὸ πνεύματος σαλευθῆ

実際の物語の始まりである。接続詞ワウは、<ところが>でなく、「さて」と訳すべきである。<エフライムにアラムがとどまった>とは、イスラエルがアラム(シリア)と同盟したということ。<エフライム>は、ヨセフの子から出た部族名であるが、聖なる部族として、10部族の代表名に用いられることがある(イザヤ 9:9、17:3、28:3、ホセ 4:17、5:3等)。<アラム>は、広い意味ではメソポタミヤに用いられるが、この場合はもちろんシリアである。イスラエル、シリアの連合軍が攻め寄せてくるというニュースが伝わると、ユダの国はパニックに陥った。1節が7章全体の主題であるとする、結論のわかっている読者に、アハズ王や国民のろうばいはこっけいに見える。ここでは<報告がダビデの家に告げられた>とあり、単にアハズとか、エルサレムの住民にと言われていないから、物語が単なる歴史的な事件ではなく、救済的に理解すべきことが示唆されている。

3節 そこで主はイザヤに仰せられた。「あなたとあなたの子シエアル・ヤシュブとは出かけて行って、布さらしの野への大路のそばにある上の池の水道の端でアハズに会い、

וַיֹּאמֶר יְהוָה אֶל־יְשַׁעְיָהוּ צֵא־נָא לְקַרְאֵת אֶחָז<sup>WTT</sup> Isaiah 7:3

אָתָּה וְשָׂאֵר יְשׁוּב בְּנֵיךָ אֶל־קִצְהַ תַּעֲלֶתְהָ הַבְּרֶכֶה הָעֲלִיּוֹנָה

אֶל־מְסַלַּת שְׂרָה כּוּבָס:

LXT **Isaiah 7:3** καὶ εἶπεν κύριος πρὸς Ησαϊαν ἔξελθε εἰς συνάντησιν Αχαζ σὺ καὶ ὁ καταλειφθεὶς Ιασουβ ὁ υἱός σου πρὸς τὴν κολυμβήθραν τῆς ἄνω ὁδοῦ τοῦ ἀγροῦ τοῦ γναφέως

主はイザヤに、息子を連れてアハズ王に会いに行くようにお命じになった。いよいよ6:9-10の「心をかたくなにするメッセージ」の応用篇である。息子の名は<シェアル・ヤシュブ>すなわち「残りの者は帰って来る」であった(4:3 注解)。それは、神の徹底的なさばきと、その後に来る一方的な恩寵による救いを象徴的に表明して名づけたのであろう(6:13)。7章の事件は、召命を受けた6章から6年後であるから、召命後間もなく生まれた子にこの名前を付けたのであろう。このことは評判になり、王の耳にも入っていたに違いない。今イザヤは、この子を連れて王の前に立つことにより、彼のメッセージの中心を思い出させようとしたのである。

<布さらしの野への大路のそばにある上の池>は、エルサレム城外の東側にあった。布をさらすためには、大量の水を必要とした、ソーダと<sup>あ</sup>灰汁のため、悪臭を伴うので、城外の水路で行なわれた。ここに、ギホンの泉と呼ばれる地下からの間欠泉があり、それが上の池と下の池(イザヤ22:9)に分かれて流れてゆく。水の少なエルサレムにとって、籠城に水源確保は絶対不可欠であり、アハズは何をおいても、まず実状調査へと走ったに違いない。しかし、国家存亡の危機にあたって、アハズがまず走っていくべき所は、別の所のはずであった。

4 節 そこで彼に言え。

気をつけて、静かにしていなさい。恐れてはなりません。あなたは、これら二つの木切れの煙る燃えさし、レツインすなわちアラムとレマルヤの子との燃える怒りに、心を弱らせてはなりません。

וְאָמַרְתָּ אֵלָיו הַשְּׁמֵר וְהַשְּׁקֵט אֶל־תִּירָא וּלְבַבְךָ <sup>WTT</sup> Isaiah 7:4

אֶל־יֶרֶךְ מְשֻׁנֵי זַנְבוֹת הָאֹרְדִים הָעֵשְׂנִים הָאֵלֶּה בַּחֲרִי־אֵף

רָצִין וְאָרַם וּבֶן־רַמְלֵיָהוּ:

LXT **Isaiah 7:4** καὶ ἐρεῖς αὐτῷ φύλαξαι τοῦ ἠσυχάσαι καὶ μὴ φοβοῦ μηδὲ ἡ ψυχὴ σου ἀσθενείτω ἀπὸ τῶν δύο ξύλων τῶν δαλῶν τῶν καπνιζομένων τούτων ὅταν γὰρ ὀργὴ τοῦ θυμοῦ μου γένηται πάλιν ἰάσομαι

<そこで彼に言え>。4-9 節は、アハズ王に告げるようにと、主がお命じになったメッセー

ジの内容である。それゆえ、<気をつけて>以下は二重かぎに入り、6-9 節の二重かぎの部分は三重かぎになるはずである。また、9 節の後、「そこでイザヤは出て行って、主が命じられたとおりにアハズ王に告げた」という文が抜けており、これはヘブル語法の特徴であって、読者は補って読んでゆかなければならない。

<気をつけて、静かにしていなさい。恐れてはなりません>は、旧約全体を貫く重要なメッセージである。<気をつけて>は、Hシャーマル(見守る)の受身語幹で、「気をつける」「注意する」「心を留める」の意味(創 24 : 6、31 : 24,29、出 19 : 12、23 : 21、サム 20 : 10 等)。Hシャークト(休む、横たわる)の使役語幹で、「落ち着く」「静かにする」「黙る」の意味(イザ 30 : 15、57 : 20、ヨブ 37 : 17)。危機の最中に静かにして黙っていることは、非常に難しい。しかも、無感覚で静かになるのではなく、危機的状況に注目し、気をつけながら、黙って静かにしているのである。

<恐れてはなりません>は、単なる思い付きの励ましではなく、その背後にイスラエルの救済史があり、神学があった。かつてイスラエル人が主なる神に導かれてエジプトを脱出した時、前には海、後には襲い掛かるエジプト軍という危機的状況に置かれたことがある。その時、主はモーセを通して、「恐れてはいけない」(出 14 : 13)とお命じになった。主が戦われるのであるから、イスラエル人は黙って見ているべきであった。それ以後のイスラエル人の歴史は、危機的状況の中で、「恐れてはならない」とのことばを繰返し聞く歴史であったとも言える。それは、積極的には「主の戦い」であり、霊的には「信仰の試練」であった。その度に彼らは、信仰の原点にかえり、あの出エジプトにおいて生きて働かれた神が、今も生きておられ、「恐れてはならない」と決断を迫られる声を聞かされた(申 20 : 3、ヨシ 1 : 9、10 : 25、サム 12 : 20、列 17 : 13、歴 22 : 13、歴 20 : 15、ヨエ 2 : 21)。イザヤ書にも、「恐れてはならない」という表現は繰り返して用いられる(10 : 24、35 : 4、41 : 10,14、43 : 1,5、44 : 2、51 : 7、54 : 4)。また、イザヤ以後においても同様であった(エレ 30 : 10、46 : 27-28、ゼパ 3 : 16、ハガ 2 : 5、ゼカ 8 : 13、15)。イザヤがアハズに「恐れてはなりません」と呼びかけることは、このような生ける神の存在を告知し、救済史に働かれた神のみわざを思い起こさせ、もう一度、このお方に信頼するようにと勧めることであった。

<木切れの煙る燃えさし>とは、火をかきまぜて燃えさしになった木切れのこと。<燃えさし>は旧約聖書に3回のみ用いられている(アモ 4 : 11、ゼカ 3 : 2)。

5 節 アラムはエフライムすなわちレマルヤの子とともに、あなたに対して悪事を企ててこう言っています。

יֵעַן כִּי־יַעַן עָלֶיךָ אָרָם רָעָה אֲפָרַיִם <sup>WTT</sup> Isaiah 7:5

וּבֶן־רַמְלֵיָהוּ לֵאמֹר:

LXT **Isaiah 7:5** καὶ ὁ υἱὸς τοῦ Αραμ καὶ ὁ υἱὸς τοῦ Ρομελίου ὅτι ἐβουλεύσαντο βουλήν ποιηρὰν περὶ σοῦ λέγοντες

6節 『われわれはユダに上って、これを脅かし、これに攻め入り、わがものとし、タベアルの子をそこの王にしよう』と。

וְנַעֲלָה בֵּיהוּדָה וְנִקְיָצְנָה וְנִבְקַעְנָה אֵלֵינוּ<sup>WTT</sup> **Isaiah 7:6**

וְנִמְלִיךְ מֶלֶךְ בְּתוֹכָהּ אֶת בֶּן־טַבְּאֵל: ׀

LXT **Isaiah 7:6** ἀναβησόμεθα εἰς τὴν Ἰουδαίαν καὶ συλλαλήσαντες αὐτοῖς ἀποστρέψομεν αὐτούς πρὸς ἡμᾶς καὶ βασιλεύσομεν αὐτῆς τὸν υἱὸν Ταβηλ

7節 神である主はこう仰せられる。  
『そのことは起こらないし、ありえない。』

כֹּה אָמַר אֲדֹנָי יְהוִה לֹא תִקּוּם וְלֹא תִהְיֶה:<sup>WTT</sup> **Isaiah 7:7**

LXT **Isaiah 7:7** τάδε λέγει κύριος σαβαωθ οὐ μὴ ἐμμείνη ἡ βουλή αὕτη οὐδὲ ἔσται

8節 実に、アラムのかしらはダマスコ、  
ダマスコのかしらはレツイン。  
65年のうちに、エフライムは粉碎されて、  
もう民ではなくなる。

כִּי רֹאשׁ אֲרָם דְּמִשְׁק וְרֹאשׁ דְּמִשְׁק רִצְיִן<sup>WTT</sup> **Isaiah 7:8**

וּבְעוֹד שְׁשִׁים וְחֲמִשׁ שָׁנָה יַחַת אֶפְרַיִם מְעַם:

LXT **Isaiah 7:8** ἀλλ' ἡ κεφαλὴ Αραμ Δαμασκός ἀλλ' ἔτι ἐξήκοντα καὶ πέντε ἐτῶν ἐκλείψει ἡ βασιλεία Εφραιμ ἀπὸ λαοῦ

9節 また、エフライムのかしらはサマリヤ、  
サマリヤのかしらはレマルヤの子。  
もし、あなたがたが信じなければ、  
長く立つことはできない。』

וְרֹאשׁ אֶפְרַיִם שְׁמַרוֹן וְרֹאשׁ שְׁמַרוֹן בֶּן־מְלִיָּהוּ<sup>WTT</sup> **Isaiah 7:9**

אִם לֹא תֵאֱמִינוּ כִּי לֹא תֵאֱמַנּוּ: ׀

LXT **Isaiah 7:9** καὶ ἡ κεφαλὴ Ἐφραιμ Σομορων καὶ ἡ κεφαλὴ Σομορων υἱὸς τοῦ Ρομελιου καὶ ἔὰν μὴ πιστεύσητε οὐδὲ μὴ συνήτε

6節に言われているアラム(シリア)、イスラエル連合の企ては、すでにアハズ王の耳に入っていたから、わざわざ繰り返す必要はないようであるが、5節に、これが主の目から見ると<悪事>であるとの評価が下されている。それゆえ、7-9節に、彼らの企ては成功しないということが預言される。事実、レツインは2年後に殺され、ペカも同じころに暗殺された。エフライムすなわちイスラエルが<65年のうちに>亡国の民になる(8)ということについては、幾つかの説がある。この事件は前734年であるから、65年後とは前669年であるが、この年にマナセがバビロンに引いていかれたのではないかという説がある(歴33:11)。もう一つは、イスラエルの首都サマリヤの陥落は前722-721年であるが、実際にイスラエルの民が完全に滅びたのは前670年ころであったとする考えである。何よりも問題とされるのは、これがイザヤの預言そのものであるか、後期の挿入と見るかである。

<エフライムのかしらはサマリヤ、サマリヤのかしらはレマルヤの子>(9)という表現の後には、次の表現が省略されていることを知らなければならない。「ユダのかしらはエルサレム、エルサレムのかしらはダビデの子(アハズ)、そしてダビデの子のかしらは主なる神である。」

<信じなければ、長く立つことはできない>(9)には、ことばの遊びがある。◻アーマン(支える)の使役語幹が<信じる>であり、受身語幹が「支えられる」すなわち<長く立つ>という意味で、語呂合わせになっている。

10節 主は再び、アハズに告げてこう仰せられた。

וַיֹּסֶף יְהוָה דְבַר אֶל-אַחָז לֵאמֹר: <sup>WTT</sup> Isaiah 7:10

LXT **Isaiah 7:10** καὶ προσέθετο κύριος λαλῆσαι τῷ Αχαζ λέγων

11節 「あなたの神、主から、しるしを求めよ。よみの深み、あるいは、上の高いところから。」

שְׁאַל-לָךְ אֹת מַעַם יְהוָה אֱלֹהֶיךָ הָעֲמֹק <sup>WTT</sup> Isaiah 7:11

שְׁאַלָה אִו הַגְּבִיחַ לְמַעְלָה:

LXT **Isaiah 7:11** αἴτησαι σεαυτῷ σημεῖον παρὰ κυρίου θεοῦ σου εἰς βάθος ἢ εἰς ὕψος

12節 するとアハズは言った。「私は求めません。主を試みません。」

וַיֹּאמֶר אַחָז לֹא-אֶשְׂאֵל וְלֹא-אֶנְסֶה אֶת-יְהוָה: <sup>WTT</sup> Isaiah 7:12

LXT **Isaiah 7:12** καὶ εἶπεν Αχαζ οὐ μὴ αἰτήσω οὐδ' οὐ μὴ πειράσω κύριον

前述のように、9節と10節の間には、イザヤが出かけて行ってアハズに会い、主の命じられたとおりに告げた、という文が抜けている。また、アハズがどう答えたかについても記されていない。10節は<再び>ということばで始まっているから、おそらくアハズは沈黙のまま突っ立っていたと考えられる。しかもその沈黙は、神のことばに対する不信の沈黙であった。ここで<主は・・・仰せられた>とあるが、もちろん語っているのはイザヤである。不信のアハズの沈黙を破るためには、単なることばでは不十分であった。<あなたの神、主から、しるしを求めよ><しるし>◻オースは、動詞◻アーワー(しるしをつける、指し示す)に由来し、旧約聖書中に79回用いられている。<しるし>は単なる「前兆」ではない。◻オースは、過去の記念と関係して用いられる(出13:9、イザ55:13)。また空間と関係して陣営の「旗じるし」となる(民2:2)。もちろん、未来を指し示す「前兆」という意味もある(申13:1-2、サム2:34、列20:8-9、イザ38:7)。◻オースの意味は「目に見えない未来的なものを指示する表象」であり、それは行為の場合(出31:13)、事実の場合(サム10:7,9)、人物の場合(イザ8:18)、神学そのものである場合(出3:12)がある。「しるし」は必ずしも良いしるしばかりとは限らない(サム2:34、エレ44:29)。

このように見てくると、<しるし>は、たとい<よみの深み、あるいは、上の高いところから>の驚異的なものであったとしても、それ自体に意味があるのではなく、それが指し示すものが重要なのである。このことを理解するなら、なぜアハズ王が<しるし>を求めなかったのか、その理由が理解される。そのためには、更に広い文脈、すなわち6章を見なければならぬ。そこでは、万軍の主なる神の聖なる御姿の前におののき、自分の罪と汚れに打ちひしがれて、霊的な死を自覚したイザヤの姿を見る。しかし、主は一方的な恩寵の行為により、祭壇の上から取った燃えさかる炭をイザヤの口に触れ、罪の赦しを宣言することにより、彼を新しく生まれさせられた。アハズ王は、差し迫った軍事的危機には神の奇蹟による援助を欲したに違いない。しかし、神の奇蹟は、神の「しるし」であって、アハズが罪と汚れのまま全知全能の聖なる神の御前に立つことを意味している。「神に信頼せよ」との預言のことばは、両刃の剣であって、敵を倒すと共に、罪と汚れに満ちたアハズをも両断せずにはおかない。こうして、アハズが<私は求めません。主を試みません>と断った理由が理解できる。アハズは申命記6:16のみことばを引用して、いかにも敬虔らしく断っているが、その背後には、不信と、罪を悔い改めようとしないうかたくなな心があった(マタ4:7)

13節 そこでイザヤは言った。「さあ、聞け。ダビデの家よ。あなたがたは、人々を煩わすのは小さなこととし、私の神までも煩わすのか。

וַיֹּאמֶר שְׁמֹעֵינָא בֵּית דָּוִד הַמְעַט מִכֶּם <sup>WTT</sup> Isaiah 7:13

הַלְאוֹת אֲנָשִׁים כִּי תֵלְאוּ גַם אֶת־אֱלֹהֵי:

LXT **Isaiah 7:13** καὶ εἶπεν ἀκούσατε δὴ οἶκος Δαυιδ μὴ μικρὸν ὑμῖν ἀγῶνα παρέχειν ἀνθρώποις καὶ πῶς κυρίῳ παρέχετε ἀγῶνα

14 節 それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を「インマヌエル」と名づける。

לֶכֶן יֵתֵן אֲדֹנָי הוּא לָכֶם אוֹת הַנְּהָה הָעֶלְמָה WTT **Isaiah 7:14**

הָרָה וְיִלְדֶת בֵּן וְקִרְאת שְׁמוֹ עִמָּנוּ אֵל:

LXT **Isaiah 7:14** διὰ τοῦτο δώσει κύριος αὐτὸς ὑμῖν σημεῖον ἰδοὺ ἡ παρθένος ἐν γαστρὶ ἕξει καὶ τέξεται υἱόν καὶ καλέσεις τὸ ὄνομα αὐτοῦ Εμμανουηλ

14 節は有名なクリスマス・メッセージであるが、このメッセージは、文脈と密接に結びついている。「国家存亡の危機」と「処女降誕の約束」は一見無関係のようであるが、<ダビデの家>を接点として結び付けられている。そこに、危機的な状況に置かれたすべての人に対するメッセージへの普遍性も見る事ができる。それは、信仰的な危機において、神の与える「ことば」と「しるし」にどのように対応するかということである。

アハズの断りは、いかにも敬虔らしく見えたが、それは不信の罪を巧妙に隠す聖書引用であった。それでイザヤは、もはや「アハズよ」と呼びかけずに、一般的に<ダビデの家よ>と呼びかける。<主みずから>。主のイニシアチブが強調されている。「よみの深み、あるいは、上の高いところから」でも「しるし」を求めようとしないうで、人間の力と策に頼ろうとする<ダビデの家>に、神の側から<しるし>が与えられる。その<しるし>とは、処女がみごもって男の子を産み、その名が<インマヌエル>と呼ばれることである。<見よ>の後に3つの文がある。第一は<処女がみごもっている>、第二は<男の子を産む>、第三は<その名を「インマヌエル」と名づける>。

<処女>(𐤀𐤍𐤁𐤍 アルマー)。ルターは「アルマーが結婚した女に用いられている例を示してくれた人には100グルテン(3グルテンで牛一頭の値段)あげよう」と言った。このことばは、単数で4回(創24:43、出2:8、箴30:19、イザ7:14)、複数で5回(歴15:20、詩46表題、68:25、雅1:3、6:8)、計9回用いられている。歴代誌第一15:20と詩篇46表題では「アラモテ」と訳されているが、これは女声合唱団のことであろう。その他の箇所では全部「おとめ」と訳されており、イザヤ書以外で「処女」と訳されているところはない。しかし、全体を研究すると、処女を失った女性の例は一つもない。旧約聖書には、𐤀𐤍𐤁𐤍アルマー以外に、「処女」を表すことばがもう2つある。一つは𐤍𐤀𐤍ナアラーで、一般に若い女性を表す。旧約聖書に62回用いられている、創世記34:3では「娘」と訳されるが、



2節を見ると、すでに処女を失っていることがわかる。また、「処女」を表すのに、普通は $\square$ ベスラーが用いられる。このことばは旧約聖書に50回用いられるが、次の箇所では明らかに処女の意味に用いられる(創24:16、出22:16、申22:19、23、28)。問題は、このことばが、結婚して処女でなくなった女についても用いられていることである(ヨエ1:8)。それゆえ、イザヤ書7:14で $\square$ アルマーが用いられている理由は、「処女」であることの強調よりも、「決して処女を失っていない」ということの強調にあると言える。70人訳はこれを $\square$ パルセノスと訳したが、これは明らかに「処女」という意味である。前述の $\square$ アルマーが用いられている箇所、 $\square$ パルセノスと訳した所は、ほかに創世記24:43だけで、他の箇所では、 $\square$ スュガテール(娘。出2:8)、 $\square$ ネアニドス(おとめ。詩68:25、雅1:3、6:8)、 $\square$ アライモース(アラモテ。歴15:20)で、あとは省略してある。それゆえ、70人訳の訳者は、文脈上から見て $\square$ パルセノスと訳したのであろう。

次に注目すべきことは、 $\square$ アルマーに定冠詞がついていることである。70人訳でもついている。そこで、16節などと考え合わせて、イザヤが、この女性の出産の間近いのを知り、それについて預言したと主張された。一つの可能性は、アハズの妻で、ヒゼキヤの誕生を指すという説であるが、この事件が前734年であると、どのように逆算してもヒゼキヤは10歳くらいのはずである(列16:2、18:2)。また、イザヤの妻とか、第二の妻であるという説もあるが、どちらにしても、自分の関係する女性を $\square$ アルマーと呼び、その女性がみごもっているというのは、不自然である。

更に、<みごもっている>は、すでに妊娠中の女性が念頭に置かれていたのではないかという主張がある。創世記16:11は同じ形で、ハガルがすでに妊娠中であることが明白である(士13:5、7)。原文は<みごもって>という形容詞だけで、過去のことか、現在か、未来かは文脈が決定する。

新約において、このイザヤの預言の成就が、処女マリヤの妊娠とイエスの命名と結び付けられ(マタ1:22-23)、また $\square$ パルセノスということばが使われたため、イザヤ書7:14の $\square$ アルマーも「処女」と訳すべきであると保守主義者が主張すれば、自由主義学者は、処女であれば $\square$ ベスラーが使われるはずであるし、70人訳が $\square$ パルセノスと訳したのは読み込みであり、イザヤが730余年も後のことを預言できるはずはないと反論する。そこで、問題点をもう一度整理すると、次のようになる。

(1)  $\square$ アルマーは「おとめ」という訳が最もふさわしい。その強調点は、「処女でないという場合が一度もない」ということである。

(2) 「処女でないという場合が一度もない」ような用語は、 $\square$ アルマー以外にはない。

(3)  $\square$ アルマーには定冠詞がついているが、<見よ。処女がみごもっている>は、イザヤとアハズがすぐ了解し合える、具体的なある女性の妊娠が考えられていたととる必要はない。将来にある女性が妊娠するという事、十分この表現に含むことができる。

(4) 特定の女性がすでに妊娠していたととる時、具体的にだれであるかを推定することは非常に困難である。

(5)いずれにしても、16節を見ると、イザヤは近い将来を考えていたようである。

(6)問題の中心は、神学的である。「おとめがみごもる」ことが、「神のしるし」でありうるものでなければならない。その場合、生理的な処女妊娠にヘブル人の理解による「しるしの焦点」があったかどうかについては、考え直してみる必要がある。

(7)この場合の<しるし>は、3つの文から成っている。おとめがみごもる。男の子を産む(動詞は分詞で自制に無関係)。その子は「インマヌエル」と名づけられる。これら3要素の有機的結合が<しるし>となっている。

(8)この<しるし>は、「よみの深み、あるいは、上の高いところから」の「しるし」以上のものでなければならない。処女妊娠であるかどうかとの議論が、生理的な面に焦点を当てている限りは、この文脈が要請しているような<しるし>の力強さは出て来ない。

(9)同時に、この<しるし>は、アハズとダビデの家の「心のかたくなさ」を極限まで追い込むような働きを持っている(6:9-10)。

(10)マタイは、70人訳の<sup>㊦</sup>パルセノスを探って、イエス誕生の由来の中にイザヤの預言を見たが、イザヤとアハズが、国家存亡の危機にあたって、具体的に何を了解し合えたのか、どのような女性と、その出産を考えたのか、現在推測することは不可能である。おとめの妊娠だけでなく、<男の子>の出産を予測し、その名を<インマヌエル>と名づけることの中に、アハズの心をゆさぶり、ついに全く心を閉ざしてしまうようなダイナミックな「しるし」の力がどこに潜んでいるかを知るには、単なる言語学的、史学、教義学のレベルの研究では不可能である。

<インマヌエル>は、<sup>㊦</sup>イムマーヌーと<sup>㊦</sup>エールの合成形である。<sup>㊦</sup>イムマーヌーは前置詞<sup>㊦</sup>イム(と共に)と、代名詞<sup>㊦</sup>ヌー(私たち)の結合したものであり、<sup>㊦</sup>エールは、一般的に「神」を表す。危機的な状況の中で、神は、しばしば、民と共におられた。アブラハム、イサクと共におられ(創26:3)、ヤコブと共におられた(創28:15)。ヨセフと共におられた(創39:2,3,21,23)。モーセと共におられた(出3:12,33:14)。ヨシュアと共におられた(ヨシ6:27)。ダビデと共におられた(サム18:14、サム7:9)。主と共におられるなら、たとい目前に危機が迫っていたとしても、安心があり、希望がある。一方、主と共におられないなら、すべてはむなしく、敗北あるのみである(出33:15、サム15:26)。イザヤ書7:14の焦点は、インマヌエル(神は私たちと共におられる)が、神のお与えになる男の子において充足されるところにある。アブラハムの場合のように割礼によるのではない。モーセの場合のように、敵を打つ災害の奇蹟によるのでもなければ、律法によるのでもない。ヨシュアの場合のように「聖戦」によるのでもない。ギデオンの場合のように羊の毛による奇蹟でもない。実にインマヌエルという「ことば」と、おとめがみごもって男の子を産むという「しるし」が、神の「人」のうちに溶け合っているところに、14節の焦点がある。

**15節** この子は、悪を退け、善を選ぶことを知るところまで、凝乳と蜂蜜を食べる。

חֲמֵאָה וְדָבַשׁ יֹאכֵל לְדַעְתּוֹ מֵאִס בָּרַע וּבַחֹר <sup>WTT</sup> Isaiah 7:15

בְּטוֹב:

<sup>LXT</sup> **Isaiah 7:15** βούτυρον καὶ μέλι φάγεται πρὶν ἢ γνῶναι αὐτὸν ἢ προελέσθαι ποινηρὰ ἐκλέξεται τὸ ἀγαθόν

16節 それは、まだその子が、悪を退け、善を選ぶことも知らないうちに、あなたが恐れているふたりの王の土地は捨てられるからだ。

כִּי בְטָרָם יָדַע הַנְּעָר מֵאִס בָּרַע וּבַחֹר בְּטוֹב <sup>WTT</sup> Isaiah 7:16

תַּעֲזֹב הָאֲדָמָה אֲשֶׁר אֲתָה קָן מִפְּנֵי שְׁנֵי מְלָכֶיהָ:

<sup>LXT</sup> **Isaiah 7:16** διότι πρὶν ἢ γνῶναι τὸ παιδίον ἀγαθὸν ἢ κακὸν ἀπειθεῖ ποινηρία τοῦ ἐκλέξασθαι τὸ ἀγαθόν καὶ καταλειφθήσεται ἡ γῆ ἣν σὺ φοβῆ ἄπο προσώπου τῶν δύο βασιλέων

17節 主は、あなたとあなたの民とあなたの父の家に、エフライムがユダから離れた日以来、まだ来たこともない日を来させる。それは、アッシリヤの王だ。」

יָבִיא יְהוָה עֲלֶיךָ וְעַל-עַמֶּךָ וְעַל-בֵּית אָבִיךָ <sup>WTT</sup> Isaiah 7:17

יָמִים אֲשֶׁר לֹא-בָאוּ לְמִיּוֹם סוּר-אֲפָרַיִם מֵעַל יְהוּדָה אֵת

מֶלֶךְ אַשּׁוּר: פ

<sup>LXT</sup> **Isaiah 7:17** ἀλλὰ ἐπάξει ὁ θεὸς ἐπὶ σὲ καὶ ἐπὶ τὸν λαόν σου καὶ ἐπὶ τὸν οἶκον τοῦ πατρὸς σου ἡμέρας αἰὶ οὐ̅πω ἤκασιν ἀφ' ἧς ἡμέρας ἀφείλεν Ἐφραιμ ἀπὸ Ἰουδα τὸν βασιλέα τῶν Ἀσσυρίων

レツインとペカの滅亡が預言される。それは2年後に成就する。幼子が<悪を退け、善を選ぶ>能力、つまり物心がつくのが、2,3歳であるから、イザヤが近い将来に男の子の誕生を考えていたことは間違いない。<凝乳>は、酸っぱくなり固まりかけた乳で、しばしば、皮袋の中で振って製造された。<凝乳>と<蜂蜜>が幼子の主食になるのは、アッシリヤ軍によって国が荒廃する結果である< 22>。それでは、キリスト誕生の預言として、これをどのように理解したらよいのだろうか。ヤングは次のように言っている。「これ(14)は予言であり、イエス・キリストの誕生にその成就を見る。しかし、15節は違った特徴を持ってい

る。預言の言語は神秘に満ちており、しばしば不明瞭であることを覚えなければならない。それは歴史の未来図を単純に書いたものではない。神秘の香りに包まれた深い美しい象徴言語なのである。」

実際に、数年後、まずアラム(シリア)が、次いでイスラエルが滅びたとき、イザヤ自身は、15、16節の幼子に関する表現を、間近さを表現したものとして理解し、主から与えられた正確な啓示であったと確信したに違いない。一方、アハズのほうは、預言の成就とは見ずに、自分がアッシリヤの王に使いをやって助けを求めた結果であると考え、ますます神のことばから離れていった(列16:7以下、歴28:16以下)。しかし、神は、逆にアハズの信頼するアッシリヤによって、<エフライムがユダから離れた日以来>、すなわち、前922年のヤロブアムの謀反以来、最大のわざわいを、ユダに及ぼされる。

18節 その日になると、

主はエジプトの川々の果てにいるあのはえ、  
アッシリヤの地にいるあの蜂に合図される。

וְהָיָה בַּיּוֹם הַהוּא יִשְׁלַק יְהוָה לְזָבוּב אֲשֶׁר

<sup>WTT</sup> Isaiah 7:18

בְּקִצָּה יְאִרְנֵי מִצְרַיִם וּלְדַבְרוֹתָ אֲשֶׁר בְּאֶרֶץ אַשּׁוּר:

<sup>LXT</sup> **Isaiah 7:18** καὶ ἔσται ἐν τῇ ἡμέρᾳ ἐκείνῃ συριεῖ κύριος μυΐαις ὃ κυριεύει μέρους ποταμοῦ Αἰγύπτου καὶ τῇ μελίσση ἣ ἔστιν ἐν χώρᾳ Ἀσσυρίων

19節 すると、彼らはやって来て、

みな、険しい谷、岩の割れ目、  
すべてのいばらの茂み、すべての牧場に巣くう。

וּבָאוּ וְנָחוּ כָּלֵם בְּנַחְלֵי הַבְּתוֹת וּבְנִקְיָי

<sup>WTT</sup> Isaiah 7:19

הַסְּלָעִים וּבְכָל הַנְּעֻצּוֹצִים וּבְכָל הַנְּהַלְלִים:

<sup>LXT</sup> **Isaiah 7:19** καὶ ἐλεύσονται πάντες καὶ ἀναπαύσονται ἐν ταῖς φάραγξι τῆς χώρας καὶ ἐν ταῖς τρώγλαις τῶν πετρῶν καὶ εἰς τὰ σπήλαια καὶ εἰς πᾶσαν ῥαγάδα καὶ ἐν παντὶ ξύλω

20節 その日、

主はユーフラテス川の向こうで雇ったかみそり、  
すなわち、アッシリヤの王を使って、  
頭と足の毛をそり、ひげまでもそり落とす。

בַּיּוֹם הַהוּא יְגַלְחֵן אֶדְנִי בְּתֵעַר הַשְּׂכִירָה

<sup>WTT</sup> Isaiah 7:20

בְּעֵבְרֵי נְהַר בְּמִלְךְ אַשּׁוּר אֶת־הָרֵאֵשׁ וְשַׁעַר הַרְגָלִים וְגַם

אֶת־הַזֶּקֶן תִּסְפֶּה: ס

<sup>LXT</sup> **Isaiah 7:20** ἐν τῇ ἡμέρᾳ ἐκείνῃ ξυρήσει κύριος τῷ ξυρῷ τῷ μεγάλῳ καὶ μεμεθυσμένῳ ὃ ἐστὶν πέραν τοῦ ποταμοῦ βασιλέως Ἀσσυρίων τὴν κεφαλὴν καὶ τὰς τρίχας τῶν ποδῶν καὶ τὸν πώγωνα ἀφελεῖ

21 節 その日になると、  
ひとりの人が雌の子牛一頭と羊二頭を飼う。

וְהָיָה בַיּוֹם הַהוּא יִחְיֶה אִישׁ עִגְלַת בָּקָר <sup>WTT</sup> **Isaiah 7:21**

וְשֵׁת־צֹאן:

<sup>LXT</sup> **Isaiah 7:21** καὶ ἔσται ἐν τῇ ἡμέρᾳ ἐκείνῃ θρέψει ἄνθρωπος δάμαλιν βοῶν καὶ δύο πρόβατα

22 節 これらが乳を多く出すので、  
凝乳をためるようになる。  
国のうちに残されたすべての者が  
凝乳と蜂蜜を食べるようになる。

וְהָיָה מְרֹב עֲשׂוֹת חֶלֶב יֹאכְל חֲמֵאָה <sup>WTT</sup> **Isaiah 7:22**

כִּי־חֲמֵאָה וְדָבַשׁ יֹאכְל כָּל־הַנוֹתָר בְּקֶרֶב הָאָרֶץ:

<sup>LXT</sup> **Isaiah 7:22** καὶ ἔσται ἀπὸ τοῦ πλείστον ποιεῖν γάλα βούτυρον καὶ μέλι φάγεται πᾶς ὁ καταλειφθεὶς ἐπὶ τῆς γῆς

23 節 その日になると、  
ぶどう千株のある、銀千枚に値する地所もみな、  
いばらとおどろのものとなる。

וְהָיָה בַיּוֹם הַהוּא יִהְיֶה כָּל־מְקוֹם אַשּׁוּר <sup>WTT</sup> **Isaiah 7:23**

יִהְיֶה־שָׁם אֵלֶף גֶּפֶן בְּאֵלֶף כֶּסֶף לְשֹׁמֵר וּלְשֵׁית יִהְיֶה:

<sup>LXT</sup> **Isaiah 7:23** καὶ ἔσται ἐν τῇ ἡμέρᾳ ἐκείνῃ πᾶς τόπος οὗ ἐὰν ὦσιν χίλια ἄμπελοι χιλίων

σίκλων εἰς χέρσον ἔσονται καὶ εἰς ἄκανθαν

24 節 全土がいばらとおどろになるので、  
人々は弓矢を持ってそこに行く。

בְּחַצִּים וּבַקִּשָׁת יָבֹא שָׁמָּה כִּי־שָׁמִיר וְשִׁית <sup>WTT</sup> Isaiah 7:24

תְּהִיָּה כָּל־הָאָרֶץ

<sup>LXT</sup> Isaiah 7:24 μετὰ βέλους καὶ τοξείματος εἰσελεύσονται ἐκεῖ ὅτι χέρσος καὶ ἄκανθα ἔσται πᾶσα ἡ γῆ

25 節 くわで耕されたすべての山も、  
あなたはいばらとおどろを恐れて、  
そこに行かない。  
そこは牛の放牧地、羊の踏みつける所となる。

וְכָל הַהָרִים אֲשֶׁר בְּמַעְדָּר יַעֲדִרוּן לֹא־תָבֹא <sup>WTT</sup> Isaiah 7:25

שָׁמָּה יִרְאֵת שָׁמִיר וְשִׁית וְהָיָה לְמִשְׁלַח שׂוֹר וּלְמִרְמָס שָׂה: פ

<sup>LXT</sup> Isaiah 7:25 καὶ πᾶν ὄρος ἀροτριώμενον ἀροτριαθήσεται καὶ οὐ μὴ ἐπέλθη ἐκεῖ φόβος ἔσται γὰρ ἀπὸ τῆς χέρσου καὶ ἀκάνθης εἰς βόσκημα προβάτου καὶ εἰς καταπάτημα βοός

17 節の展開であるが、散文から詩文になり、表現内容はより象徴的、比喩的になる。17 節の焦点は、アハズの恐れるべきものは、レツインとペカではなく、アッシリヤであり、ティグラテ・ピレセルであるということであった。18 節以下では、それが、アハズ王に代わって一般的なユダの民全般へのさばきの預言となり、アッシリヤによる徹底的な破壊を意味するようになる。18-19 節では、エジプトが<はえ>、アッシリヤが<蜂>にたとえられて、それぞれ、ユダをくまなく荒らし悩ますことが預言される。

20 節では、アッシリヤが<かみそり>にたとえられる。頭の毛やひげをそり落とされることは、ユダヤ人にとって非常な恥と考えられた。

21-25 節には、国の荒れた様が描かれる。国自体が荒れて、耕地はなくなるが、人口も非常に少なくなり、逆に畜産物は有り余るという皮肉な結果が生じる。<銀千枚>(23)は、銀千シェケルと同じである。銀は 8-14 グラムの小片を流通単位とし、これを一枚とか 1 シェケルと言って勘定した。どれほど高価な土地も、さばきの日には荒れすたれて無価値となる。

㊦アルマ-הַלְמָה

<単数形で用いられている箇所>

創世記 24 : 43

ご覧ください。私は泉のほとりに立っています。おとめが水を汲みに出て来たなら、私は、あなたの水がめから少し水を飲ませてください、と言います。

הַנְּהָ אֲנֹכִי נֹצֵב עַל־עֵינַי הַמַּיִם וְהִיָּה <sup>WTT</sup> Genesis 24:43

הַעֲלָמָה הַיְצִיאָת לְשֹׂאֵב וְאָמַרְתִּי אֵלֶיהָ הַשְּׂקִינִי נָא

מִעֵט־מַיִם מִכַּבְּדָךְ:

<sup>LXT</sup> **Genesis 24:43** ἰδοὺ ἐγὼ ἐφέστηκα ἐπὶ τῆς πηγῆς τοῦ ὕδατος καὶ αἱ θυγατέρες τῶν ἀνθρώπων τῆς πόλεως ἐξελεύσονται ὑδρεύσασθαι ὕδωρ καὶ ἔσται ἡ παρθένος ἣ ἂν ἐγὼ εἶπω πότισόν με μικρὸν ὕδωρ ἐκ τῆς ὑδρίας σου

出エジプト記 2 : 8

パ口の娘が、「そうしておくれ」と言ったので、おとめは行って、その子の母を呼んで来た。

וְתֹאמַרְלָהּ בַת־פְּרַעֲהַ לְכִי וְתֵלֶךְ הַעֲלָמָה <sup>WTT</sup> Exodus 2:8

וְתִקְרָא אֶת־אִם הַיֶּלֶד:

<sup>LXT</sup> **Exodus 2:8** ἣ δὲ εἶπεν αὐτῇ ἡ θυγάτηρ Φαραῶ πορεύου ἐλθοῦσα δὲ ἡ νεάνις ἐκάλεσεν τὴν μητέρα τοῦ παιδίου

箴言 30 : 19

天にある鷲の道、  
岩の上にある蛇の道、  
海の真ん中にある船の道、  
おとめへの男の道。

דֶּרֶךְ הַנְּשִׂאָה | בְּשָׁמַיִם דֶּרֶךְ נָחָשׁ עַל־י צוּר <sup>WTT</sup> Proverbs 30:19

דֶּרֶךְ־אִנְיָה בְּלִבַּיִם וְדֶרֶךְ גֹּבֵר בַּעֲלָמָה:

<sup>LXT</sup> **Proverbs 30:19** ἴχνη ἀετοῦ πετομένου καὶ ὁδοῦς ὄφρα ἐπὶ πέτρας καὶ τρίβους νηὸς ποντοπορούσης καὶ ὁδοῦς ἀνδρὸς ἐν νεότητι

イザヤ書 7 : 14 前出

<複数形で用いられている箇所>

歴代誌 15 : 20

ゼカリヤ、アジエル、シェミラモテ、エヒエル、ウニ、エリアブ、マアセヤ、ベナヤは、十弦の琴を用いてアラモテに合わせた。

וְזָכְרָהּ וְעִזְיָאֵל וְשִׁמְרָמוֹת וְיַחֲזִיאֵל וְעַנְיָ <sup>WTT</sup> 1 Chronicles 15:20

וְאֵלִיָּאֵב וּמַעֲשִׂיהוּ וּבְנֵיהוּ בְּנִבְלִים עַל־עַלְמוֹת:

<sup>LXT</sup> 1 Chronicles 15:20 Ζαχαρίας και Οζιηλ Σεμιραμωθ Ιηλ Ωνι Ελιαβ Μασαϊας Βαναϊας  
ἐν νάβλαις ἐπὶ αλαιμωθ

詩篇 46 表題

指揮者のために。コラの子たちによる。アラモテに合わせて。歌

לְמִנְצַח לְבְנֵי־קָרַח עַל־עַלְמוֹת שִׁיר: <sup>WTT</sup> Psalm 46:1

<sup>LXT</sup> Psalm 45:1 εἰς τὸ τέλος ὑπὲρ τῶν υἱῶν Κορε ὑπὲρ τῶν κρυφίων ψαλμός

詩篇 68 : 25

歌う者が先に立ち、楽人があとになり、  
その間にタンバリンを鳴らしておとめらが行く。

תּוֹפְפוֹת: <sup>WTT</sup> Psalm 68:26

<sup>LXT</sup> Psalm 67:26 προέφθασαν ἄρχοντες ἐχόμενοι ψαλλόντων ἐν μέσῳ νεανίδων

τυμπανιστριῶν

雅歌 1 : 3

あなたの香油のかおりはかぐわしく、  
あなたの名はそそがれる香油のよう。  
それで、おとめらはあなたを愛しています。

לְרִיחַ שְׁמֹנֶיךָ טוֹבִים שֶׁמֶן תּוֹרַק שְׁמֶךָ <sup>WTT</sup> Song of Solomon 1:3

עַל־כֵּן עַלְמוֹת אֶהְבֹּד:

<sup>LXT</sup> Song of Solomon 1:3 καὶ ὁσμὴ μύρων σου ὑπὲρ πάντα τὰ ἀρώματα μύρον ἐκκευθὲν  
ὄνομά σου διὰ τοῦτο νεανίδες ἠγάπησάν σε



雅歌 6 : 8

王妃は 60 人、そばめは 80 人、  
おとめたちは数知れない。

שְׁשִׁים הָמָה מְלָכֹת וְשָׁמַנִּים פִּילֹגְשִׁים <sup>WTT</sup> Song of Solomon 6:8

וְעַלְמוֹת אֵין מְסֻפָּר:

<sup>LXT</sup> Song of Solomon 6:8 ἐξήκοντά εἰσιν βασίλισσαι καὶ ὀγδοήκοντα παλλακαί καὶ  
νεάνιδες ὧν οὐκ ἔστιν ἀριθμός